

第四百十四回 青葉会

令和二年十月二十二日 午後一時半～五時 於：文京区民センター会議室

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 長谷見びん

星田啓子 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか

福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

投句のみ 楠田ヒロミ(彦十) 中川雅夫

選句のみ 赤田堅 安部眞希子 小西弘子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆

早川充章 松崎浩 村田くに子 山本三恵

《互選句》 ○は特選 ◎は孤舟選者の選

八点 金木犀使ひ慣れたる仏和辞書 正明(眞・紀・五・弘・充・啓・ゆ・規)

七点 ◎秋うらら犬の顔にも賢愚あり 恵洲(眞・孤・○堂・正・啓・浩・亜)

外野手の大き欠伸や秋うらら 仝(眞・○そ・孝・敏・啓・亜・け)

見慣れたる癖字の文や曼珠沙華 堂哉(そ・五・健・ゆ・隆・け・三)

籠居や白菊の香に独り酒 ゆたか(紀・た・堂・隆・○充・浩・○三)

◎言論の自由危ふし翹雲 正明(堅・紀・忠・○孤・○敏・啓・規)

スマホする乗客ばかりそぞろ寒 昇(○堅・眞・紀・龍・敏・啓・亜)

◎秋高し天守の鯨は機嫌良し けい子(紀・孤・五・弘・健・亜・○盛)

六点 名月や紙を丸めて遠眼鏡 孤舟(忠・弘・千・た・隆・天)

◎赤とんぼ見ればかの歌口を衝く 恵洲(堅・孤・た・孝・規・盛)

無造作に松茸盛らる直売所 昇(紀・千・敏・び・く・○天)

記念樹の柚子の実たわわ家古ぶ 盛雄(紀・龍・ゆ・び・規・く)

五点 一村を沈めし山湖十三夜 孤舟(紀・弘・健・び・け)

◎うそ寒や軒を連ねる仏具店 五郎太(そ・紀・孤・恵・三)

しなやかに風を纏ひて秋桜 昇(紀・千・た・○恵・充)

カマキリの我が目はったと睨みけり 規雄(紀・堂・敏・○啓・天)

◎新そばを打つ青年の長き指 けい子(そ・紀・孤・恵・浩)

## 四点

◎枯露柿やふく粉不思議と酒に合ひ 亜也(紀・孤・千・く・盛)  
我が青春「枯葉」唱ひしグレコ逝く 天牛(敏・隆・び・充・正)

土手高き原発岬に小鳥来る 紀久男(○眞・恵・○正・盛)

新月の通り路灯す火星かな 健介(紀・五・○け・盛)

秋深しマスクは個性を發揮する 千恵(紀・忠・龍・隆)

宵の雨夜半の雲間に秋の月 ただしげ(孝・び・浩・く)

松の影一段と濃し月仲秋 雅夫(堅・紀・○た・三)

◎きりんの首檻より伸びて秋高し びん(眞・孤・充・け)

少年の愁思の顔や阿修羅像 昇(そ・○千・○孝・敏)

◎青天をキャンバスに山粧へり 全(紀・孤・○健・孝)

## 三点

思い出は父と酒酌む秋の午後 そらお※(紀・忠・弘)

(※独り住まいの父を新酒をさげて慰問した昔の思い出)

身に入むや義太夫三味線客まばら 紀久男(忠・堂・規)

GOTOで季節外れの墓参り 忠彦(紀・龍・た)

簀をあげて秋日と老ひを語りけり 雅夫(紀・五・孝)

「考える人」に上野の银杏散る びん(健・隆・正)

散り敷ける金木犀に轍(わだち)跡 啓子(千・龍・堂)

標高は二千五百や草紅葉(立山・室堂) 全(紀・○規・天)

ウォッカを薄めて北の鮭を焼く 盛雄(紀・○龍・正)

## 二点

籠り居の夫婦呆け気味衣被 紀久男(恵・ゆ)

句師からのヨーグルト生き秋偲ぶ 忠彦(紀・く)

閑けさや団栗落つる山の音 全(紀・く)

口喧嘩济みて二人に虫の声 全(そ・紀)

秋夕陽裏打ちの文透けてをり ヒロミ(紀・亜)

ブランコに誰か居たらし月今宵 全(紀・浩)

初物と茹で栗五つ渡さるる 全(紀・ゆ)

讃岐路は黄金(こがね)の暈彼岸花 ただしげ(紀・孝)

十六夜の月鮮やかに讃岐富士 全(ゆ・く)

爽やかや五体に入みるビバルディ 堂哉 (堅・紀)

◎焼き栗の大粒選りて爪を立つ 全 (孤・け)

◎遠富士の雲茜さし芒原 ゆたか (孤・三)

源氏読み我が生き思ふ秋深し 雅夫 (紀・龍)

椿の実はじけてまろぶ黒き種子(たね) 啓子 (紀・弘)

林立する感染グラフを追ふ夜長 びん (健・正)

秋冷にふと思ひ出す外地かな 亜也 (紀・く)

秋の蚊や羽音なきゆゑ逐はずおく 全 (紀・恵)

一点 亡き父が毎年待てる鴟の贄 けい子 (紀)

木犀を吸ひつつ辿る家路かな そらお (び)

紅葉旺ん(さかん)秘湯にドライブ命がけ 紀久男(忠)

溪(たに)紅葉乳白色の露天風呂 全 (充)

雁の棹薄暮の空を一文字 孤舟 (紀)

ブーメラン秋の空より不時着す 全 (五)

自在鉤かそけく揺れて夜半の月 全 (天)

破糸瓜壁の白さの現れて 五郎太 (三)

お出かけは揃ひの帽子天高し 全 (紀)

しなやかに通勤在宅秋の朝 健介 (〇亜)

長き夜やアリアの調べ甘やかに 千恵 (紀)

もふもふな赤き綿あめほうき草 全 (紀)

足冷えて久に取り出すくつ下や 全 (浩)

十六夜の月待ちすれば山の端に ただしげ (堅)

野の芒手折て供ふ今日の月 堂哉 (た)

人声もまばらな出湯秋夕焼 ゆたか (〇紀)

陽の透けて花脈くきやか酔芙蓉 啓子 (紀)

コロナなどどこ吹く風とトンボ群れ 規雄 (天)

胡麻香る天ぶらの色鯨の色 亜也 (紀)

織月や惑星も見ゆ三つまでも 全 (恵)

拾ひつつ捨てつつ秋の雑木道 びん (〇五)

枝下す音のみ聞こゆ木の天辺 天牛 (紀)

変はりなき万葉令和月天心 盛雄 (紀)

コロナ鬱そしらぬ顔の菊人形 全 (紀)

### 【句評】

#### 八点句 「金木犀使ひ慣れたる仏和辞書」

啓子さん：金木犀の重たい香が窓辺の机にも漂ってくる。手に持つは古びた仏和辞書。使うのはフランス語の達人に違いない。落ち着いた、しかしやや艶めいた空気感。

#### 七点句 「秋うらら犬の顔にも賢愚あり」

堂哉さん：コロナになって近所での散歩が増えました。多くのワンちゃんに出会います。確かに美醜、賢愚があります。

浩さん：とてもほのぼのとしていいが、「あり」の終わり方は「かな」、「見え」等ほかの音の方が好み

#### 「外野手の大き欠伸や秋うらら」

啓子さん：外野手の欠伸でうららかさが増幅。草野球かと思いましたが、プロでも外野はそうそう球が飛んでこない時にはありそう、テレビに映ったら恥ずかしいかも？とかまびすしくコメントが行き交いました。

#### 「見慣れたる癖字の文や曼珠沙華」

隆さん：曼珠沙華の造形美。癖字さへ美に化ける。

#### 「籠居や白菊の香に独り酒」

隆さん：籠り空間は修行さえ出来そうな澄んだ空間。僅かな香も鮮明。充章さん：私の庭にも菊の香が満ちてをり、私の生活そのものです。

浩さん：「一人」でなく「独り」のところがいかにも寂しげで良い。

三恵さん：白菊の香と独り酒という普通はマッチしない対象が「籠居」で繋がってしまう“感性”が見られました。

紀久男：小生もまったく同様なのですが残念ながら菊はございません。奥床しい句と思います。

### 「言論の自由危ふし翺雲」

堂哉さん・・・世論の盛り上がりは今ひとつですね。私も一人ぶつぶつ言っているだけです。

啓子さん・・・時の話題、それも変わったばかりの新政権における問題含みの措置を上手く句にされたなと思いました。

びんさん・・・敗戦後75年。今や翺雲ならぬ嵐への予感!?

紀久男・・・句座で選者が「らしくない」句を選んだので皆さん驚き。

### 「スマホする乗客ばかりそぞろ寒」

堅さん・・・実感です。日本の将来どうなるのか、誠に嘆かわしい現実です。

啓子さん・・・季節の寒さとどこか貧しい心のうそ寒さを見たか季語が上手く嵌っている。

亜也さん・・・想像したくない光景だが「そぞろ寒」に合っている。

### 「秋高し天守の鯨は機嫌良し」

盛雄さん・・・壮大な景。コロナ禍など吹き飛ばす。ユニーク賞。

### 六点句「名月や紙を丸めて遠眼鏡」

隆さん・・・「名月は紙の筒にて独り占め」では。

### 「無造作に松茸盛らる直売所」

五郎太さん・・・「盛らる」↓盛らるるでは？

天牛さん・・・貴重品と都会人は思っているのに、無造作はとても効いているのが面白かったです。

### 「記念樹の袖子の実たわわ家古ぼろ」

紀久男・・・毎冬、盛雄さんから仰山ご惠贈に与っており、ご近所へお裾分けしております。

### 五点句「うそ寒や軒を連ねる仏具店」

恵洲さん・・・どこか無常観がある仏具店にうそ寒さが似合う

紀久男・・・どぜう鍋やスキヤキの店に近い地下鉄の駅を上がると通り道にございます。国際通り。

### 「カマキリめ我が目はったと睨みけり」

堂哉さん・・・睨み返したのでしょうか?!はたまた?

啓子さん・昆虫写真家の有名な作品にカマキリが崖の上から街を睥睨しているものがありますが、それを思い出しました。カマキリはまともに顔を見ると眼が大きくそれをはったと睨んでくるという表現が面白い。

紀久男・・・当初上五は「の」でしたが「め」に訂正されました。

「しなやかに風を纏ひて秋桜」

恵洲さん・・・秋桜が風に揺れている様を、風を纏うと捉えたところがユニーク

「新そばを打つ青年の長き指」

恵洲さん・・・おしゃれな現代青年が長い指で不器用にそばを打っている感じが感じられる。

浩さん・・・なんとなく新鮮で気持ち良い。

「枯露柿やふく粉不思議と酒に合ひ」

千恵さん・・・私も干し柿が大好きで、確かにお酒によく合います。

※ご出席の皆さまはお酒を召し上がりつつこの場面、干し柿談議で賑やかでした。

「我が青春「枯葉」唱ひしグレコ逝く」

隆さん・・・「グレコ逝く幾度唱ひし枯葉頃」・・・唱ひしで青春も含ませてよさそう。

五郎太さん・葬儀にはマクロン夫人も参列。色々な人が歌いましたが、イヴ・

モンタンと彼女がこの歌の双壁でした。

びんさん・・・自分が選んでいてなんですが・・・歌のタイトルは季語にはならない？

四点句「土手高き原発岬に小鳥来る」

眞希子さん・命あるものはもう生きられない地と化した原発汚染の地だが、人々は土手を高く築くことで前進の一步を踏み出した。それを祝い励ますように渡り鳥がやってきてくれた!!希望というメッセージを感じいただきました。

恵洲さん・・・原発のような無粋なものからでも秋感じられる感受性。

正明さん・・・土手高き云々”小鳥が今年も来た“というのは悲しい。胸が痛い。

盛雄さん・・・原発の句は数多いが、世論もやや落ち着き小鳥が遊びにくるまでになったか。

紀久男・・・浜岡原発は津波防止に堤高くしましたが、風下の町の承認得られず廃止に。すぐ隣が御前崎灯台です。

「新月の通り路灯す火星かな」

五郎太さん・このところ、空を見あげることが増えている。中秋の名月、そして満月のときに、暈がかかっていた赤い星は火星らしい。いつの間にか月は下弦に、そして暗く、新月になった。火星はまだ南の空に輝いている。こうした観察と、「通り路灯す」が、上手だと思いました。

けい子さん・通り路は単に帰宅の道かも知れませんが一寸色っぽい気もしますね。

「秋深しマスクは個性を発揮する」

隆さん・・・題材は良いです。ずばり放った点は惜しい。「照紅葉マスクに描いたハットリ君」とか。ニュースで藤子不二雄(♫)先生のマスクを見て。

「宵の雨夜半の雲間に秋の月」

浩さん・・・宵と夜半が重なっているのが気になるが、光景は自然に浮かんでくる。

「松の影一段と濃し月仲秋」

ただしげさん・・・秋の深まりを感じさせる作品。松の影がああ、いい風景だなあと感じます。

「少年の愁思の顔や阿修羅像」

千恵さん・・・阿修羅像は仏像の中で最も好きな像です。阿修羅さまのお顔と「秋思」という季語がぴったり合っている感じがします。

「青天をキャンバスに山粧へり」

健介さん・・・背景たる空をキャンバスに見立てたアイデアに敬服。絵が目には浮かびます。

三点句 「身に入むや義太夫三味線客まばら」

堂哉さん・演劇や音楽関係は本当に気の毒です。最近は思い切って出掛けています。

「簀をあげて秋日と老ひを語りけり」

五郎太さん・簾(すだれ)あげ・・・のほうがいいのでは。

紀久男・・・しみじみとした好句

「考える人」に上野の銀杏散る

隆さん・・・秋の季語で銀杏は映える。「銀杏降るロダンの像の上野かな」

「散り敷ける金木屋に轍(わだち)跡」

千恵さん・・・家の近くにも金木屋があるのですが同じような景があり、それを「散

り敷ける」という言葉で表現しているのが良いなと思いました。

堂哉さん・綺麗な絵が目には浮かびました。

「標高は二千五百や草紅葉」

規雄さん・リュックを背負い草紅葉の中の山径を一人歩いている情景。秋は物思いの季節。いい句ですね。

「ウオッカを薄めて北の鮭を焼く」

龍平さん・この夏はベランダで「焼酎オンザロック」をロシア産の干し鱈でチビリチビリやりました。

二点句 「籠り居の夫婦呆け気味衣被」

恵洲さん・「呆け」の字がきつすぎる感もあるが老夫婦に衣被のあしらいが良い。

「秋夕陽裏打ちの文透けてをり」

亜也さん・茶席の軸でしょうか？敢えて茶席と言わないところが良い。

「初物と茹で栗五つ渡さるる」

紀久男さん・友人やご近所からお裾分けに与りました。「初物と」がいいですね。

「秋の蚊や羽音なきゆるる逐はずおく」

恵洲さん・一茶の、やれ打つな蠅が手をする・・を思わせて弱いものを見る目が優しい。

一点句 「紅葉旺ん(さかん) 秘湯にドライブ命がけ」

紀久男さん・米沢・姥子温泉 急カーブのきついアップダウンの山道。十一月か

ら閉鎖の由。

「ブーメラン秋の空より不時着す」

五郎太さん・秋になってからのコロナウイルス再燃を詠んだ??

「しなやかに通勤在宅秋の朝」

亜也さんさん・コロナネタでいて愚痴にならず爽やかなのが良い。

「長き夜やアリアの調べ甘やかに」

※ロシアのバリトン歌手(故人)ドミトリー・ホロストフスキーのアリアと。

「足冷えて久に取り出すくつ下や」

浩さんさん・「あるある」の光景ですね。



「人声もまばらな出湯秋夕焼」

紀久男……湯治に行ったことはありませんが、子供の頃、祖母が仲良しと二人で嬉しそうに出かけて行ったのが思い出されます。

「織月や惑星も見ゆ三つまでも」

恵洲さん……このところ月と惑星の「天体ショー」が話題になっており、それを上手く句にされた。

「拾ひつつ捨てつつ秋の雑木道」

五郎太さん・上手い表現。こういうのも句になるか！と感服。

\* \* \* \* \*

●次回青葉会 令和二年十一月二十六日(木)午後一時半～ 文京区民ホール会議室

▲当季雑詠五句 投句二句(五句までお受けします。締め切は十一月二十四日午前中)



令和二年十月青葉会報

一 今月は亜也さんから8名出席。投句は ゆたかさんら13名。千恵さん寄贈の純吟

「蓬萊」(飛驒)、孤舟選者の「菊水・辛口」(新潟)、啓子さんの煎餅、亜也さんからの栗のスイーツ、小生持参、広島の社友田部修司さんからの大吟醸「雨後の月」(呉)と山形土産で蝗の佃煮、ビーフジャーキーなどを賞味しつつ開会。進行役の五郎太さん披露でご覧のように正明さんら6名が高得点でした。回覧は眞希子さん・天牛さんのファックスと、社友田隅恒生さんの翻訳書「知恵の七柱」(平凡社の東洋文庫2008年8月アラビアのロレンスの著書S・ウィルソン編集の全5巻)(田隅さん・1954年入社、テヘラン・ニューヨーク・マニラ・丸紅紙業等。2019年他界)……社友会の幹事をされた今泉政春さんから、丸紅切ったの大文人と御推奨を受けていた。同書も含め「訳者前書き」「訳注」も詳細を究め、こなれた文章で読み応えあります。

盛雄さんからのファックス……九月句会報で「秋爽や見知らぬ人と萩の寺」について、小生が季重なりと指摘しましたが、何と固有名詞でした。大阪豊中にある曹洞宗の古刹「東光院 萩の寺」(創建400年)。句評誤りです。早トチリを反省しております。

二 関係者近詠

送迎を一手に家長雲の峰		眞希子	首曲げて蠟螂われを睨みけり	規雄
一筆かメールにせんか朝曇	全	・・「ZIN俳句」十一月号	西村和子選	
空蟬群る大樹の陰の通用門	全	冷で飲む「日本遺産」や伊丹諸白	盛雄	
盆僧のコロナマスクの瞳の若し	全	・毎日新聞兵庫文芸十月	若森京子選	
九十九里渚へつつつ夏千鳥	弘子			
爺ちゃんが海の先生夏休み	全	柿を剥く妻の手ゆらりダイヤ婚	盛雄	
コンビニの深夜の桃にバーコード	全	富有柿終ぞ怒らぬ母なりき	健介	
はらからの南無氣遣ひの今年米	陽亮	しなやかに猫の尾のごと秋桜	紀久男	
新米を指しなやかに研ぐ夕べ	全	・・・・きさらぎ句会	十月	
茸飯丹念に雑ぜ一撮み	全			
いま鳴きしちちち廚のどこに棲む	全	夏の蝶形状記憶の翅畳む	孤舟	
空き腹に秋刀魚味噌煮をかき込みて	紀久男	太古より変わらぬ迅さごきかぶり	全	
・・・・「森の座」十一月号		船虫のなにやら謀議して散りぬ	全	
腹割って話せば解る栗の毬（いが）	正明	忠言は直球がよし青山椒	全	
木の実落つ命に限りあるものを	全	裏返る海月に悩みあるやなし	全	
撓りつつ揺れつつ光る式部の実	充章	・・・・「爽樹」十一月号		
吾亦紅夕日に細き影となり	全			
いつも身を風に委ねて貴船菊	全	曼殊沙華お寺参りの道標	秋元 宏	
「還暦退職の友へ」			(名古屋の社友)	
還り年高きに登る夫婦かな	三恵			
還暦や夫婦登りし百名山	全			

三 日経俳壇・金子兜太の弟子、黒田杏子選の九月十月に注目した作品の中から4句列挙  
してみました。

「夜学士に樺美智子の父の声」和城弘志（久慈）

・・都庁が丸の内にあった頃、夜間の大学へ通う先輩が結構居られました。同級生  
にラーメン屋台を曳いたり、バーヤクラブ勤めの苦学生が居った時代です。

「蛤となり絶滅す被曝雀」 桃心地（大船渡）

・雀が減った原因は住宅の屋根に巣をつくる隙間がなくなったのが主因と  
思われます。

「トラックの神輿は揺れず秋祭」 青部嘉一郎（浦安）

・三社祭が十月催されましたがトラックに乗せられ、氣勢上がらず。

「原発忌浪江の友の転墓聞く」 木村誠一（八戸）

四 創立30周年記念 「三田俳句丘の会 作品集」（10月発行 角川書店 93名各30句  
398頁 ¥3,000）

「なまはげ」川口襄 30句より小生好みの10句をご紹介します。

草履屋も和菓子屋も春神楽坂

波の花笠に干さるる魚の腸

小春日を潮騒とある妻とある

侏儒の声する紫陽花の毬の中

獵夫の目して人混みに紛れ入る

地球儀に紛争はなし望の月

帆船もわれも遊子や夏の雲

なまはげの吠え星空を沸きたたす

寒鼻わが脚本に妥協なし

薄暑光盲導犬は眼閉ぢ

五 キノブックス編集部編集「酒呑みに与ふる書」（2019年1月29日 ¥1,500）

佐藤春夫 マラルメ ボードレール 村上春樹ら6名の文人の言葉

俳句 三句掲載されていました。

「酒の爛此の頃春の寒き哉」夏目漱石

「扇にて酒くむかげやちる桜」松尾芭蕉

「晝酒の鬼の踊りし曼殊沙華」森澄雄

令和二年十一月十五日

紀久男 記